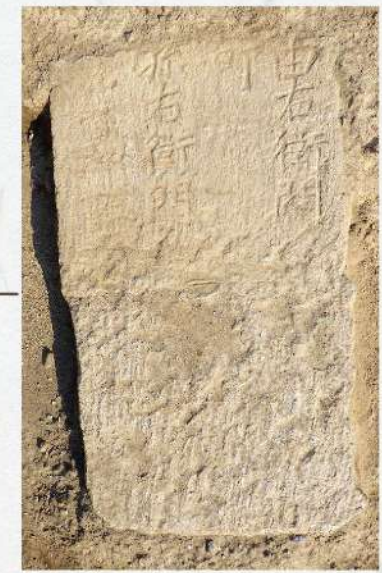


神社に奉納した人々



(左) 孫右衛門
(右) 由右衛門



拝殿基礎石 (記念碑の再利用)

池田家は代々栗橋宿の本陣役を務めていた池田家「由右衛門」の名がみられます。「孫右衛門」は、利根川で舟の運送に従事していた船頭と思われる。

板屋庄兵衛



灯笼の一部

米穀屋さんでした。栗橋宿の年寄役も務めていた商家です。

伊豆屋勘兵衛



灯笼の一部

幕末期には旅籠屋を営んでいたようです。

きた ちょう め じん や あと
北2丁目陣屋跡

八坂神社跡の調査から

令和3年9月26日(日)
遺跡見学会資料

調査区の図

盛土の範囲



ごあいさつ

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団では、利根川堤防の拡幅に伴い平成24年から発掘調査を続けてきました。本年度は「北2丁目陣屋跡」を調査し、八坂神社跡から見つかったものを御紹介します。栗橋という町が400年近くおまつりしてきた神社の成り立ちを見ていきましょう。

神社の由緒

慶長年間(1596~1611)のころ、利根川は洪水を起こしました。その乱流の中で、鯉や亀に囲まれるように神輿が流れてきたことが八坂神社の創建の由来と、『新編武蔵国風土記稿』にあります。寛保二年(1742)には大洪水で社殿が流失しましたが、翌年には再建されました。その後、明治初めには「牛頭天王社」から「八坂神社」へ改められましたが、町内では今も「天王さま」と呼ばれて親しまれています。



石段と石置の奉納者

本殿へ至る石段と石置は「照沼清兵衛」が寄進しました。彼は栗橋から那珂湊の商家へ養子に入った人であったようです。



奉納
水戸中湊
照沼重右衛門

常州中湊照沼清兵衛者東武栗橋驛村田利兵衛二男也雖身在他邦以其土地神崇信牛頭天王朝夕禱祀不解獲其獲祐家益繁榮於是出贖財若干新造石段及石砌以報恩其人皆感神之有靈又嘉清兵衛之不忘本也仍勒之於石以表其功德云
元治二季乙丑三月 北總山朝夷





基礎底部出土瓦

瓦

風雨に吹き飛ばされないように、屋根には瓦が葺かれました。古くなった瓦は、建物の基礎として地面の補強材にも使われました。

板屋さんの灯籠 / 紀年銘灯籠



文政元年（1818）に奉納された石灯籠の一部が、石垣の裏支えとして残されていました。町内の「板屋」「伊豆屋」といった商家が奉納したものが、再利用されたもののようです。

天王さまにお願い / 拝み絵馬



令和元年度の発掘調査では、絵馬が出土しました。よく見ると、拝んでいる女性の姿が描かれています。これは「女拝み絵馬」と呼ばれ、女性が祈願をする際に使われていました。

大山帰りの霊刀 / 奉納木太刀



事業団 468 集 巻頭図版 2 より

「奉献大山石尊大権現 大天狗小天狗 御宝前」と書かれています。神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社の奉納品が護符として持ち帰られたようです。このように、江戸時代には大山詣でが大流行しました。

天王さまを敬ってきた町 / 奉納玉垣の人名



神社や手水舎を取り囲んでいた玉垣は、大正十四年（1925）とその翌年に、町内の人々がお金を出し合って設置されたものでした。当時の栗橋に暮らした人々の名前が刻まれています。

おさいせん

お賽銭箱の周りから、たくさんの寛永通宝が出土しています。

石鳥居を固定しよう

明和三年（1766）、石段の上に石造りの鳥居が建てられました。これは町内の資金で、町内の石工がつくり上げたと記されています。その重量を支える石組みにも、またひと工夫されています。

神社の柱のお足元 / ロウソク地業

地面ではなく盛土の上に鎮座する神社なので、柱を支えるための基礎構造を工夫しなければなりません。溝のように大きく掘り下げた穴に石を三段積み上げ、周りは土や砂利が少しずつ固められています。最後に石が縦置きされ、まるで蠟燭を立てたようです。建物（拝殿）の四方には、このような基礎がめぐらされていました。

拡大図



拝殿基礎石



宿場町の外れにある一の鳥居をくぐり、石畳を渡って見上げると、神社の社殿が眼に入ったことでしょう。栗橋の八坂神社は、小高い盛土の上に鎮座していました。

その盛土の範囲を含めた北2丁目陣屋跡の発掘調査では、牛頭天王社（八坂神社）に関連する遺物が多く出土しています。

石畳をはじめ石灯籠や古い玉垣、絵馬・木太刀などの遺物の多くは、町の人々が奉納したものでした。「天王さま」として親しまれてきた神社は、栗橋の町とともに、数百年にわたって受け継がれてきました。



明治・大正時代のころの八坂神社（栗橋町消防団） 久喜市栗橋町史より

